吉村公

芦かね根 一字題

百首 外 若紫 九 八帖

ロ 9
3807

吉村公

あれ下根

一字題百首

[illegible]

# 蕙の中根

ちかき比去年のくわり給ふ志軒しる由を梅て弓およぼけたまひ
しれはかくやふの手もおほしてき侍らへてよめ田におとすしく
見まひ給せて程に功によりしる手しもやとみたりて大和まなこし
の文なるちかけしみるをおひ女なかへある事とも書つけ侍りし
凡人の子は中又男子は師をもとく古の文をまなひ身をおさむる
ふとなるわしむるを何れも女はいとけなきより深窓にかくれて
人にまみゆる事もなけれはたのしかる道の行もまうとしく稀も
なくして其は家をまもり夫に志たかふ為なれはおやのもとに侍るも
いぬと志えしのうちもじよりけしきころをそえるべきんずしと
めくたからん
人はたへんまて結ばいかにかろちやうつくしく世にまたくれ々とも
心ろさまは深き川にそわか思ひ根そふかくはらさとしてさたかならぬ
心をまよひなくかりそめ々もあたなることなく何る物か深かの西根
のなさけめぐみもあつくおさ渕をもたらん人をこそ家とうとしとも

昭和十六年三月五日
石澤介吉氏寄贈

門 ロ 9
號 3807
巻

さためて偏にもあすれなるへし 後悔すへきこと無かれたれく
たゝ正直にて道理を知りぬれハいか様にもやわらかによく随ひなする
すく侍ることにやかりめの云事ふもさからぬきことをいふ次第のとく
すくなく志すへし
そのうへて男も女も人のこゝろハ朝に夕に思ひ事にまよへれハことゝも
わたくしの計ひとにそ志るしてゑや能く慎みふへし 女ハ三従の道あり
いとけなくしてハ親に従ひ ひとつなりてハ夫に志たかひ老ては子に志た
かふ のちのわれハわかみをたてゝ思ひところそハ人の志のひちりまくを行ふへかる
重しとうけ給る他の人ともにかたちかよし 夫を天とするたとへ君とも
なすへ侍る也 又おのきこゝろとゝもみて志たかへ従ひかふつることと女乃
道なるし 男ハ外をつとめ女ハ内をなすむる是天地陰陽自然の
ことなり 女ハ内のこともとゝのへて外のことハいかにもあはれ
かる事か次 内外男女のわかちを以しせへし 物ことともつ
我か心の儘にすへからす次 一生の身をもて事を道夫のいゑをひとへにまもらす
ことりうわのそらにしれきなしみ求むへからす次 わかちハかんはしきをなし
一偏に誠を本としたりふへし 忠臣ハ二君につかへす貞女ハ

二人の夫にまみへすと云や女のみさをゝたもちたるハ忠臣の世の例とせる
に同し ものとしの曹夫叔か妻ハ父母の命によりむきて再とき
方に玉氏か妻ハ安ひをたてゝ夫の為に命をうしなふ
我 朝にてもけふくひ多し 貞心のまもりハ女の常なりと善人
ことに志るす所なれとも才も能なすもの心ハ危すからんに伺さへ
清少納言か才ハ 但かしきぬハ夫のもとを去るまことに自から
身の浮やめもよしくなきを侍らぬ志るしとなりけんまてつゝる
まつることもハ我か家にあわもし時父母につらふれかねとも女ハ
一度人の家にゆきてハ夫の父母をわか父母と志るものなる故に孝行のみち
朝夕にわすれぬ事へかつの事ハ終にまつかひて仕へをつくすへし
わか里へも人をやかせて夫の家をそのかゑもなるへからす家の事ハ
よりくその志をかわるもの也 必しもその家の定をまもりてそむき
務ふるへかゑ次 わかさしをもひて夫の家のとゝそあいしもまに
過ひ親まいりハ婦人の多くあるへから次 又かりそめにも人に向ひても
わか里のことのみ云ふへからす かたはら痛く心にくき物なり
はへりなり能くよたのふへし

第一嫉妬の心を慎しみあるべし　古の聖人の定めたまふ女は七つ去る
つらき道あるなり　たしなみたまふべき逆道なり　さ程に
ねたむ心より夫に志たがふ道なるを忘れ閨門の内さわがしく
終には夫にうとみすてられ　父母の名をもけがす婦と
なれり　わが国にも皇后の立たまふおりに女御更衣の数あまた
をかれしもそもろこしの法に天子には十二人諸侯は九人卿大夫は
三人士は二人の婦女をたくはへ給ふもいさゝか色を好み欲にひかる
るには有らず世継の絶ぬやうにとの為なりそのしも庶人にいたりても一夫
一妻なるべし子なき者はおなしくその妾をとる　識ある人の妻たる者は
夫の為に女を求めて其世継のたえざらんやうを計ふこそ道なれ
我ひとりの愛をもとめむためかへりて他をそねみねたみあるは
浅ましき[illegible]かぎりなることなるべし
酒のりあそびなどする人のなくてはならぬものなれどもおほく酒に
ふけり遊び長じたるは男子もそこなはるゝ事なりまして
女の身にて一入慎しみあるべし　是がおこりとなりて
法ともなき事をもたやすくいひいだし礼を乱るもとなるべし

言葉もいやしき上下分際をわかつべきにはあらずかく
中にも夫とて夫の為に志をもたのむなり　かゝる奥をもよく
されんとおもはゞそれより[illegible]いましむべきにもあらず心得
ほどにこゝろみつゝ身をたしなみて御心やすくさせ給ふべし
けだしていふときは世にあるべき何ぞも得る志あるもの[illegible]
なる遊びかへすがへすにそみて思あるまじきなりかゝる女子は
人の心をかるむけうとさる中にて得るなり
人をめし仕ふには慈悲なるをあはれみいとけなきをもすけ
おろかなるには愛の心をもとにもすべし　いかにも身を
りきさかしき女房あるとも　くちさがなく人をあざむき
すこし目のたちかはる事はかならずかたへのものゝ心しと識べく
おそく云さんかしこしくおぼしめせはなきものなりとこれさへ
何事も思ふまゝなりしを朋友のまじはりあしくても君の家を
我が身にかゝはらずもとしんにおもひそ思ひそめやかしく
あはれたゞむかしのならびにうまれあひてもん出しあつて生まれ
なき恥をかくさけと　かけくいの助けを第一と心得べし

才能ハなくともかゝる物のめくミまことにしり君の命をかしこまりける

ものなり其外ハ不好る女ぬ耳ミなれたる事をとこともふ

うちそむかれたくひハ物なきのちよめし清くふへかゝる浮娘の手すさひ

となるものなりとも何そ清けてもふみしかきいよかくぬるとにしく

侍るたとひ人にさかへる事わりとも見へぬ言葉にあらわして

いかなるふ庵うるも女乃たとへ言葉ハかゝるちかくれなきもいと見に

くきものなりて朝夕川のへ侍るものなりともたそれくる難しみそく

よそえまても名れ立れにて詩歌なりとも彼の庵の訓とかやいへる

文にも其の才道く昔佐ハ歌人の見算すらくいんことら世にあれ

聞つたいんなるも思昔出る宗例有りなき人のとゝもきを

めうしきたなしる事の常のすにて四季右の出た事へしらふ

実にさ難ことこそ覚え侍れ

古へ婦人子をたとみても朝夕起臥にも才のちみなりとにおもせて

かりそめなる事しるにをのこ守て露もよこしまなる事

まぬかれさせむめ教子を容儀たゞしく女人のまもるとがり接

おちめのかしこきをえらむ事も人のうちを専にかくへし歩の

孟母もそ三度住所をえらむで子ハせめても文周の大任ハ其身に

清かへるをも志く太子の徳乃まします故周室のうち能

そもそも君乃たゝしけとなりともなへり御事をうみなへるとそ故正し

かりしかとも后の文王をうみ文周の代さかんにめてたく治て皆

とせまて伝り侍るとのや其余の代までの婦女の鏡としるく

もろこしの文にもえる侍りと思ひ出難きにかけて其章かき

いらねあしの下根のながくしる清け侍りぬいとたこかましし

きをもえこそたゝへ侍りぬめ

中将吉村

志らしれし世のふるきとしをあらためてみよそふるこゝそハ行当く

とも

宗村御かへし之

大父君の御かへし御筆をとめさせ給へる事し給ふ文にしるく
大姫君子君のいとまなく打そへし時雨ひとつせなりとこそなり
識に秋の露の子を思ふ御心ねいとせちにましまさずよに
有がたき庭訓を忘べくされいけいましめ乃御心村子君にかきら
ず御かたくしもまた見て見を胡々誦侍のまくにしるく心は
いちはやくかすかに侍りしかなるそれ瑕子君も出家し
てうしたへられいまそれ御方の為めのこるをふましたる宝ある
ぬしとも思ひたへられそ当いとされをうち心しく辨へて見むか
便りともなれかしと思ふれよまかせ筆をとゝへるくれなりかし
たのむ
御上の御識を待まち御身にいせちに求め奉る日夜なくおかけられて勅
きこるわまんすをあるまつ思ひ奉へはへ古の聖賢の手
云第詠耳ずれてきく覚へ有る歌よみなれたる人まにも
見この御父は今日のことまでも主君につけ御身をとこるひ
かすへきかてん定まるる宗族をいかなるやうまてまいた
つまことにてきいたらするんを本として加えそのかも

六十條
御九よ出るへるそんれへし

霞 鶯 梅 柳 蕨 桜 桃 梨 雉 鶴 蛙 菫 薊 躑

詠百首和歌

吉村

霞の名も春に埋れし去年見し雪の面影もなし
鶯 新たつ春雨かきの老さくよ庵たてまな鶯のこゑ
逢なれ立枝にさく春風の声もかをれ新乃梅の香
なれする枝よられ春の色をとゝりていそく庭の青柳
下蕨の宿乃日かれ摘し跡まさおいとく手折されむ
咲色香も志くもう川し植し我家桜うつろへ詠めて
桃なせ見たなる花の香よかれやすひれ桃のにほつき
枝さえに積れと見ゆる雪の色を清なかり咲し山梨の花
子を思ふ雉かてくめてすこをれ鳴むまたのきくに鳴
立そ見かへる雁の声さきすのみ見に聞ゆる
まむれを見へねかはの水にかどのかありかと蛙なくらん
春の野の小菫に見てなつかしく咲るをそれの花すみれ
よしのの川ぞ咲さかぬの岸の山ふき
夕附日人まし陰よてるもきよしの色のくれなゐ

鵲　鴫

蘭落露萩荻泉蓮蝉蛍扇森鶏橘鵜葵夜

岸たかき松の梢に咲藤の花波のかゝるとやみえん
たま〳〵あふ時にあふ瀬の流れからかけてや契る神の言葉に楽き
行とらし思ふを色のあるひとや山のかきたる年に独る
神ふき志きの末の梅かと見れ共わき白ふたち花
あやなくも水鶏やたゝくらんさして月みる柴の戸に
このたひは晴ぬ日数に池水も汀鏡る庭のけみたれ
手になるゝ扇の風もたゆ秋乃国の是さ故に忘れて
かけてらく蛍をとんでも思ひあれやまなきぬ家にくらき我身
なく世みの聲山と木かけ雨も聞て声も風にきこしき
秋ふかみ夕風からふ泉の面に花さへきすくかほる色は
岩ねなる蓮を涼しく道かれてなかき夏なき山の下水
淋しさも穂に出て秋風の庭はさなから乃ふした荻
庭に咲小萩をも見てもふかれし露をも思ふ宮城野
いかにせん枯れる秋の露をもむすびても浅き袖の雫に
ちくまさの風からはぬ露ならは尾花か袖はいかにしほれん
野へ遠く来てみよとてや夜霧白き送る秋の世のうせ

蒙

雲寂霙氷君霰霧蔦菊鴫鶉月秀虫鹿雁

雲井路に嵐も遠き天津かりほとを庭なくに鳴て来ぬらん
聞秋萩なき山田の小屋にたちにも人のいふ妻やこふらん
開道く月も宿すおきまもしきなれも中秋庭の思ひ残して
吹きよふ萩根も晴る秋風も木の下をとめくる中空の秋きたる
ふかれはなくて其むかしの草葉もやいかにあさぬむすびし夜の月
ちく露も夜ん涼しき袖迄の庭芝に床ふかれてやなく鳴らん
中絶ぬ秋の思ひのうき数をも金形みとも小牡鹿の鳴くの月
万代の秋を庭ぬへきかなともや葉おもる庭の菊のもとに
露を志るならばかけず秋ぞ枝よりかゝる蔦のいろ〳〵をさき
山深き露の事はいかならむ里の本末も紅葉なるに
ませ秋を見し日数のいたしかなま鳴く時雨の音も来にけり
外くよみてし落葉を庭の霜に降りしきと分かる庭
うちまるる袖はへ音し山川の氷をとく人しれぬそに
前を吹嵐とまもし夜明るきたれてみる空の光のみなれ
湊津の波いこぼれる岩か根をまとくきけて数なれたな
なひきつみ雨の竹の末たれてあさき名の山本

鴨 鷺 衾 枕 暁 朝 昼 夕 夜 星 雲 風 雨 煙 山 野

散うき志ゐふきくける池水に鴨の青羽重ねもかはらぬ
はしたかの羽やそむる涙もなし道も志らぬ野邊の梢にも
折とけて見ゆる夢を都しかさねさる衾にさへ塞のふしまい
里人のかりそめ枕の志ら黒木に契るもさ志山風の
鳴渡る夕けるにも夏には夜東をちあるきも夜
朝風に袖くらしてあんむら鳥のあくる林のゆきそくすり
けさの日影に消る朝霧も夕暮まてよ夜やゑをまし
ふるさぬあきもかくこれとも手をとりて夕暮に思ひわける
いねかてに月あらうきぬし此露く後思ありめて交る枕の花
桜の井にとまたき夕星の光よそんまさりけそ給ね
定めなき世の雲志れは人の世と風のゆ情の夜の浮雲
春秋の稍にさ散ふ花の露に同しつさき風にちり見ゆる
帰りて折見るとといそく夜の人に笠をきあへぬ雨の
浦風の吹しくよしに雨後の末も浪につるに
雲霧のかゝる見すもたちき谷いくする時すそ富二の煙山
安達野のすゑの露ふ宿て霧の三瑳ふかけの空傳

関 河 海 庵 窓 門 墻 橋 竹 蓮 苔 蘋 蘆 松 杉 柳
苫 薦

たえすも戸ほ海世にすら白河の関のかゝめ名のみそえて
人のよそ世い目かくと定めなす花る乃川の瀬ひそみうき
漕舟の往来も風もし四方れ海波も流れかそ静ぬ世に
打志め隠に音なき草の露いなへその雨もえるさめの一夜
雪をこそあけぬ窓も燈の光をさくよそそむけそやねん
春秋の月日を送き谷の中は老も老そふ名の門をとされて
引かける嬰木のうすい限のそれたみも風まわれゆく山住そうき
世を渡る橋をかけまし人をよ誰かんのます乃従えし
植しこきまことよ見んしも氣ふかく蓮のよるもなし隠れ其行
露をたな又柳人なかね見え志けりしまうれ落かゝる
秋夕の光ももと紀谷かけに露を結ひてこけ乃さむ志ろ
風またよ何とそれぬへきたらぬひて根ゆしも乃ぬ波の浮
州とらはうき草も波に從ぬへきまことをそたけの宿乃夜海
吹きく新後山高き梢よる波の音ある松の世の乃くえ
隠蒔杉中又木高き深露夫とい志草よ山家乃杖むら
いけ川の世又神の三や人極知て今も柳の立さかふらむ

桐 柏 鶴 鶯 鴫 塩 鵆 鹿 馬 猿 猪 年 鏡 衣 枕 筵

風の音もまつ波の月に散りて桐乃一葉ふく秋をさそへし散
音きゝしかけはし見えし沈むかしいまの葉ふきてさむしき鶴山風に
なれし文古巣きえぬ庭もりや柏をたれはなれかふひな鶴
若の葉をつゝむ渡る雲のえぬ声を聞てなる白さき
波をわたる夜ゆる吹うき鳥の音をきくかゆかしき花にそきく
秋風も夕暮しき窓の外に竹を孫くらの家をとの夜
うき山し沖の岩はよそれまし鴫の世乃浮波をさそひて寝迹
いさしれ世のうけ浪よそへうたら住山よふりりぬとも
里をとき見渡きになりゆく釣し人にさしかふみたえたえあらぬ
大和ふ字秘を虔はして山法し志く散くふ又ましら鳴し
身にそうてなけかれかれ夜とやしさに引ぬの舞乃やをさんにも
らしや身にうけとたなれぬ小車のいつまて同し世を追らん
猶にぬなし稲さしも十寸鏡ふ露ぬ影をんとはせん
素ふかれてしも濡衣月きよの冬のかきうけり袖の袖なれ
いのれよや一夜の夢に百年乃まそ見えしかん行むの枕もそ
あり侘をとりける室のさむしろに志く枕はなき月かけ

年

筆 硯 灯 舟 書 弓

志は志今うたゆむまとの音を松よのたえらく風そそゝめる
雲とちく寺の鐘を見ぬ山の尾上に色そく入相乃そら
更くる光ますゆる月ハ今入ぬる影乃窓乃ともし火
みなと舟にこき出て眺る夜の千里の波にさそさかるらん
見渡るそみふ寄かたし松そてまそまるせる文に稲さかしたち
此を次まて岩ほよりけるかりや思ひをの思をなびき初めなむ

七夢四十六首
實陰

右百首和哥者正徳二年在府列随公私暇至同三年而詠之
早去年武者小路黄門實陰公更添削及之首後今清書
又今再點今度改加清書者也
正徳甲午弥生中旬

# 仙臺領地名所和歌

陸奥山　うごきなき世の栄を今も咲くこがねの花をみちのくの山　通躬

末松山　末来ていく世ふる浪も見へぬ名をとどめてる末の松山　雅通

籬島　くちなしの露の深みに入えこそ岩日の山乃のみちそ　公長

宮城野　ぬるるまでみかさいふなる宮城野の木の下露の袖に涼しき　秋季

志や菅原　空のうちかすかにかくれてことゝはむいさ白菅の志かや原　輝光

奈古曽関　たまさかに今も咲けば立すさむ名こその関の名にたくへて　実積

緒絶橋　ふみ人の渡らね橋やおもひ絶え緒絶の橋の名のみ高き　為継

玉造江　芦鶴る玉造江のここの節々面白霧を見てや涼しき　経音

名取川　今宵の月をみるまま名取川流れにや結ん波の埋木　有放

玉川　くもる月も空行く秋の玉川にて渡る千鳥の声をしるし　惟永

衣川　むかしたか衣にさらせる衣川かけて朽せぬ名は流れけむ　光栄

阿武隈川　そめはせむ世にあふくま川の老人で渡りせむよそに波の白雪　公野

不来海　恋侘る袖をなけくにあかの海やくたち千鳥の緒もなく　通夏

十府浦　波枕仮寝を涼し浦風の月に明しく十府の菅ごも　実陰

塩竈浦　松が枝に積る雪見えたくひなき浦の名ぞたかね塩竈の海　豊忠

小島
松島
浦湾
袖波
武隈松

波わるきみつの小湾の汐風になれてさらぬおしまの浦　實岑
まつしまやをしまの秋乃月影にさそはれぬる波のかよひ見む　為信
そのかみむきいそ松島湾に筆とりたる川の千代よもふらん　資時
涙しほへぬ露なるうきを旅衣袖の波かの波よぬるさま　為久
いくとせかみどりかはらで武隈の松は二本乃さかへみすらん　通識

予嘗撰封内陣跡勝地其名最著請冷泉為綱卿以出題需和歌于公家諸名公各詠一首自筆短冊輯為一帖云
正徳龍集乙未孟夏之日
左近中将吉村識

廣橋兼忠卿
久我惟通卿
六条有藤卿
押小路實岑卿
武者小路公野卿
大炊御門経音卿
風早公長卿
同實陰卿
藤谷為信卿
清水谷雅季卿
豊岡資時卿

塩松八景

塩竈浦霧
こぐ舟の波の綱手もうけて名もたかし塩竈の浦は志ほ　實陰卿

雄嶋旅雁
ゆくかりの数よりまく松島の雄しまの波の月を見て　通夏

月見湾月
たまさかよおくかれて海に秋すりの月見の湾の名残とあけむ　光栄

蒲寺晩鐘
ねさめよりねの宅きに霜乃むぬ蒲寺の鐘はきこゆ　輝光

籬湾夕照
波のうへに秋春の影もなしまかきが湾に名をたてて　為久

浮湾帰雲
塩釜のうら波たれる深みどりなれとまかせぬ浮しまのまゆ　通識

海濱漁火
庵たけれずなにをきれてや松島漁火　通躬

末松山暮雪　為綱

一

夢ならぬ海よりくれてとみ山のよそめかゝやく雪乃しらたへ

惟今松嶋扶桑之名區奥陽之勝境也人口之所膾炙野夫市童聞而知之然其地去京甚遠非所公卿縉紳游觀者之輙雖自古其歌頌見其景於書圖知勝於傳聞未見旁稱其景盡記其勝者豈不遺恨哉予因思之不借撰西地美景可稱者爲八題出于冷泉黄門高細卿需詠歌于公家俊輩八人各詠一首和歌已成今年自書寫以藏之于塩西所殆雖以女子事因和歌以著名勝之實且爲後來之玩弄不爾乎

于時正徳甲午年仲春季八

羽林中将藤原朝臣吉村

甲府八景

夢山春曙　中院 通躬

きのふまてゆきなきし春も夢山のゆめとをかすむ春のあけほの

石和流螢　日野 輝光

いさゝ川夜なき波のよるくいはの螢かけそなすかな

龍華秋月　武者小路 實陰

名よしおなし岸成秋の月やたなそこの曉乃空の名かけ哉と

金峯暮雪　久世 通夏

日のかけもくれぬと志はし金峯はゆきそらかねの嶺にかゝやく

富士晴嵐　入江 相尚

ふもとよりおろす嵐にせちく一むらの雲をはらふふしのしらゆき

酒折夜雨　冷泉 為綱

くれぬまの嵐にたえてさかをりの枕にうる秋のあめにぬるやと

恵林晩鐘　桐山 光顕

白根夕照　中山 篤親

志ろかねなる夕のかけのあらわてこれは心の池もにこりなし

この夕浦の影を晴ていまむかしの根の君にあふまで

右之八景者松平出羽刺史依懇望而正親町一位公勧進之尤歴
勅許之趣
正徳乙未年

出雲八景

社頭叢燈

八重垣の出雲のむかし名たてゝもてらすはこやのともし火

槐下 中院通躬

八雲山晴嵐

あらし吹嶺もあらはす山の名のいひもそらさぬ清き光りを

権大納言光栄

素鵞川帰鳥

ゆきかへる千鳥そかよふ雲霧をてらす夢を見くれ夜のかはりて

左衛門督雅香

御埼山秋月

木の間より月いなさめのみさき山神代の秋乃えことなりし

右近衛中将宗家

真名井清流

みよやこのいその清水なかれてや世をも清き神のちかひを

権中納言為久

出雲浦舟

渓舟

西倪 公福

釣のいとにもつれくる小舟も出雲のいさり火も浦に舟かよふらし

三尾翠巒

浪をしのぐとめ(?)三尾をみとりなる松や志ろ人とつはやもろふ

光禄大夫通夏

高濱暮雪

こぎかへる小舟もみえずや夕風よ雪の波よするをあれまり

正三位 實陰

跋

雲州大社海内之勝地而未聞有所題詠也國造之祠人等舟以為忘近遠録圖境景自八四浮屠釣月以不見之風早三位實積郷乃属題於冷泉黄門為父卿之當朝名郷詠歌可謂金玉連響而成調義矣已而三日四請余書其後三品余通家也故不得辞以不文云

前黄門菅原長義

松の油ゆり紀こゝそん
立帰る今を何とに引網のめにあら汐かし波の名所に
日
今ぞ[illegible]近き也迄え人見よとひとこそて帰ら松ら[illegible]しも田
[illegible]松紀ゆ
若菜摘星の何事ままま志花[illegible]て秋[illegible]の行末
[illegible]
あさるの[illegible]を[illegible]まそて小山田のかりおの[illegible]ハむな[illegible]をさし
あきれたる田を荒もふせきえぬ小田の[illegible]やの術の住居ハ

日光山紀行丹
裏見瀧
岩か根にひきなたえて山深き荒の松をこゆる
山とみおつるひゝきハ岩か[illegible]中にこそ落つせ瀧
日光山 [illegible]
[illegible]山まさやのおりのまんうろふ[illegible]かさの宿をそれ[illegible]
[illegible]
[illegible]てれて[illegible]山の花ともひらにいたる月の[illegible]
[illegible]
[illegible]月ほとなさまみて陽しなたるものゝ空し[illegible]

ねかはく[illegible]の世[illegible]子の[illegible]に[illegible]えかとこれ
[illegible]
志たは[illegible]松風にそその[illegible]
[illegible]
なまき[illegible]の名る所と[illegible]は月おはえ[illegible]
あはれ[illegible]秋の[illegible]
宮前の紀
[illegible]
[illegible]
河浜の立帰つと[illegible]
日光紀行
東海の[illegible]神乃徳き恵ハ[illegible]
及れる[illegible]
[illegible]文の[illegible]